台湾アイデンティティにつながった「環島」

エッセイスト・女優　一青　妙

一昨年の５月末、台湾が世界に誇る自転車メーカー・ジャイアントジャパンの中村晃社長からの「台湾一周・環島のお誘いです」というタイトルのメールに、こんなことが書かれていた。

『一青さん、半分台湾人でしょ。台湾人なら台湾一周の「環島」をしないと』

最初は自分に台湾一周などという大それたことができるのか不安もあったが、中村社長の強い誘いに押し切られ、気がつけば、約半年後の11月に開催された“Formosa900”という、世界各国から台湾一周を自転車で走る人たちが集まるイベントに参加することになった。

この文章では、「環島」がなぜ、私のなかの「台湾アイデンティティ」を刺激するカンフル剤になったのか、みなさんにお伝えしたいと思う。

台湾人と日本人の間に生まれて

私は台湾人の父と日本人の母を持つ日台のハーフだ。生まれは日本の東京だが、生後まもなく台湾に渡り、幼稚園、小学校と11歳まで、台北の現地学校に通った。昭和３年、日本統治下の台湾に生まれた父は、母語が日本語のため、我が家の共通語は日本語。それ以外に、親戚と交わす台湾語や、学校で学ぶ標準語としての中国語（北京語）と、多言語に囲まれながら幼少期を過ごした。

味覚や基本教育は台湾仕込み。自分は「台湾の子供」だと思って暮らしてきた。ところが、父の仕事の関係で、11歳以降は生活の拠点を日本に移し、日本の中学、高校、大学へと進学した。

普通に日本語を話せたので、苦労することなく、日本での生活にすんなりと馴染んだ。自己認識が「台湾人」から「日本人」へ変わるのに、そう時間はかからなかった。

我が家で唯一台湾とつながりのある父は、私が14歳のときに肺がんで亡くなっている。以来、母と妹と、残された私たち家族の間で台湾を意識することは急速に減っていった。ときどき思い出したように、台湾に住む父の親戚たちと連絡を取っていた母も、私が21歳のときに胃がんで亡くなった。以来、妹と２人暮らし。「台湾」について、考えたり、話したりすることがない日々が続いた。避けていたわけではない。まったくその必要性がなかったのだ。

再び台湾と繋がったのは、それから20年ほどが経過して起きた、ある「箱」との出会いがきっかけだった。

箱は、両手を広げたのとちょうど同じくらいの大きさで、やや暗い赤みを帯びたベンガラ色の木製。これまで家族４人で住んでいた家の押入れの、奥底に眠っていた。

両親の記憶がつまった「箱」との遭遇

ずっしりと、体の芯にこたえるほど、寒さが重く感じた底冷えのする朝だった。2009年の冬、私たち家族４人で暮らしてきた一軒家が解体された。新しい家を建てるためなのに、ひどく喪失感に襲われた。

建て替えを決めたときから、家の整理が始まった。大量の食器、父が読んでいた本、母が着ていた洋服……。残すものと捨てるもの。たくさんのものを取捨選択しているときに、大きな段ボールのなかの箱を見つけた。

この箱の中から出てきたのは、両親が結婚前に台湾と日本で交わしたラブレターや、父の闘病の様子を記録していた母の日記、私の名前が刻まれ

見つかった「箱」

た母子手帳、そして、両親が台湾で撮った写真などだった。

ひとつひとつ手に取り、目を通した。色あせていた台北の小学校の校庭、リヤカーを引いて豆乳を売りにきていたおじいさんの顔、空の青さなどが鮮やかに思い出された。忘れていた台湾の風景が走馬灯のようによみがえってきたのだ。

10年以上暮らしていたのに、ずっと空白となっていた台湾での記憶が、堰を切ったように、一気に目の前にあふれ出たｘ。

思わぬ形で「台湾」に触れた私は、すぐに台湾に向かった。しかし、台湾を離れてからすでに30年近い月日が流れていた。飛行機から降り立った台北は、すっかり変わってしまっていた。台北101ビル、地下鉄が乗り入れる台北駅、通りに並ぶコンビニエンスストアなど、その全てに驚かされた。

幸いにも、昔、家族で住んでいた家はまだ残っていた。いまは知らない人が使っているが、外から建物を眺めれば、当時の生活がぼんやりと頭をかすめていく。

「パパはどんな人だったのだろう」

台湾の地に立ちながら、台湾人であった父がどのような家で生まれ育ったのか、どんな理由で日本に内地留学することになったのか、なぜ母と結婚したのか……。実は、自分の親なのに、私は何ひとつ知らなかった。

もちろん、14歳まで一緒に暮らしていたのだから、父の顔や声はわかっている。ただ、父の深い部分を知るには、私は幼すぎた。

父の記憶を尋ねて歩く

箱を見つけたことから、父や父の家族のことを知りたくなり、頻繁に台湾を訪れ、親戚や知人を聞き回って歩いた。

父の名は顔恵民という。台湾で「我姓顔（私は顔です）」と名乗れば、多くの人から「是基隆的顔家嗎？（基隆の顔家ですか？）」と聞かれる。そうです、と答えると、「很有名的大家族吧！（有名な大家族でしょ！）」との反応が返ってくる。

父の一族である顔家は、多くの台湾人がそうであったように、18世紀の福建省からの移民で、台北から少し北にある港町・基隆に居を定めた。日本統治時代の台湾で、金鉱や炭鉱の開発で財をなし、当時は台湾の「5大家族」と呼ばれた。

金鉱は九份にあった。九份はいま、スタジオジブリの作品『千と千尋の神隠し』の舞台であるとも言われ、赤い提灯と急斜面に続く階段のノスタルジックな雰囲気が人気を呼び、最近の台湾を代表する観光地となっている。昨今、観光列車として人気の平渓線も、かつての顔家が敷設したことを初めて知った。

基隆にあった父の生家は、日本家屋や西洋風の

ありし日の基隆顔家邸宅

建物が立ち並ぶ6万坪近い広大な土地で、湖のような大きな池もあったらしい。皇室が台湾を訪れた際の宿泊場所にも指定された。手入れの行き届いた庭園は、当時の台湾における三大名園にも数えられ、地元の学生たちが遠足の場所として訪れていた。台湾で数台しかなかった輸入車を保有し、運転手さんやお手伝いさんがいたという。話を聞いて回るうちに、本当に「大家族」であったことを実感した。

12人兄弟の長男として生まれた父は、10歳から親元を離れ、日本へ内地留学した。終戦後はいったん台湾に戻ったが、再び日本に密航という形で戻っている。40歳で結婚するまで台湾に戻らなかった。

結婚してからの父は、長男として家業を継いだため、私たち一家は台湾で生活をすることになった。ところが、父は心の病を抱え、酒とタバコに身を任せ、亡くなるまで、うつ病という状態から抜け出せなかった。

その原因は、アイデンティティの悩みにあった。日本人としての教育を受けた父。友人はもちろん全員日本人。話す言葉も、歴史観も、国家に対する概念も、すべて日本人のものだった。自分のアイデンティティを完全に「日本人」として捉えてきた父が、終戦を迎え、一転して「中国人（あるいは台湾人）」にさせられたのだ。

それまで仲間だと思っていた周囲の人たちは戦敗国である日本の国民で、自分は突然、戦勝国である中華民国の人間という線引きをされ、父は、それまで信じてきた全てのものが信じられなくなってしまったようだ。

台湾人でありながら、日本人。日本人になりきれない台湾人。日本人だと思っていた台湾人。国家とは、身分とは、人生とは何か、そんなことを問い続け、アイデンティティに苦悩した生涯だったということを、父が亡くなって30年以上経って、ようやく少し理解することができた。

両親の問題から、自分のアイデンティティへ

家族との記憶を綴った2冊のエッセイ

私は、そんな父を主人公とした初めてのエッセイ集「私の箱子（シャンズ）」（2012年、講談社）を書いた。父の姿が少しずつ浮き彫りになり、立体感を帯びたことで、父の心に数歩寄り添うことができたと思っている。

その後、父の物語から母の物語を紡ぎ、「ママ、ごはんまだ？」（2013年、講談社）という、母を主人公としたエッセイも発表した。

様々な人々の話を聞いて歩いていると、触発されたのか、今度は自分自身のアイデンティティを見つめなければ、と考えるようになった。

これまで、アイデンティティという言葉とは全く無縁だった。しかし、よく考えてみると、自分のなかには「日本人」と「台湾人」の2つの部分が確かに存在している。その「台湾人」の部分を掘り起こし、見つめてみたくなったのだ。

幼少期を台湾で暮らし、台湾の現地校で私が教わったのは中国からやってきた国民党による一党独裁のもと、いつか中国大陸に戻るという信念の「反攻大陸」をスローガンにした「中国人」としての教育だった。

授業で覚えさせられたのは、李白や杜甫の漢詩であり、中国大陸で最も長い川や山、中国5000年の歴史だ。歴史、地理、人物などで扱われる内容の大部分が中国中心で、台湾人であるのに台湾

を知らないまま学んできた。

台湾に足しげく通うようになり、各地で美味しいものを食べ、綺麗な風景を写真に収め、興味深い発見もいっぱいあったが、それでも「何か足りない、本当に台湾のことを私は知っているの？」という気持ちがずっと心のどこかにくすぶっていた。

そこに、冒頭の台湾の自転車メーカー・ジャイアントの中村社長からの台湾一周・環島の誘いが舞い込んだのだった。最近の台湾では「台湾人になるための儀式」として、自転車で台湾を一周する環島が受け止められていた。私は、何かに導かれるように、自転車での台湾一周チャレンジを決めた。

formosa900 の出走式イベント

台湾一周は 1000 キロ

ここからは、私の環島体験記を紹介していきたい。

「環島」とは、文字どおり、島を一周ぐるっとまわることを指す。中国語では「ホワンタオ」と読み、いま台湾で大流行している自転車旅である。

参加した Formosa900 は 2011 年に始まったイベントだ。ジャイアントの旅行会社、ジャイアントアドヴェンチャーのスタッフが参加者をサポートしながら環島できるツアーとなっている。およそ 700 人が集まり、1 チームは約 30 人。台湾の各地から台湾一周を目指し、スタートした。

台湾は一周すると約 1000㎞になる。自転車での環島は、だいたい初心者から中級者は 8 日から 10 日をかける。1 日約 100㎞走るという計算だ。上級者になると 6 日や 7 日で走りきる人もいる。私は、11 月 5 日に台北の市政府前を出発し、時計回りに、8 泊 9 日かけての台湾一周「環島」を始めた。

環島中の 1 日の動きは、おおよそ、こんな感じである。

朝 6 時起床。朝食後、準備体操を行い、出発。だいたい 20㎞ごとに休憩を挟み、再び走りだす。昼食後も同様に自転車に乗り、日が落ちる前にその日の目的地に到達し、夕食を食べる。夕食後は洗濯や翌日の準備を行い、布団に入れば瞬く間に眠り込み、また翌朝を迎える。

食べて、乗って、寝る。単純なことの繰り返しと心地よい疲労感が体を駆け巡る。まるで学生時代の部活動の合宿のようだ。

台湾は、亜熱帯と熱帯の両方にまたがっている。出発地の台北はまだ亜熱帯地域。台中から彰化、雲林と進み、3 日目に嘉義に入ると、熱帯と亜熱帯を分ける北回帰線を越えて、一気に熱気を帯びた空気が体にまとわりつき、周囲の植物も南の島らしく大きく変化した。

嘉義から台南にかけては、台湾の一大穀倉地帯が広がっている。台湾の教科書にも紹介されている日本人土木技師の八田與一が作った烏山頭ダムのおかげだ。台湾の稲作の多くは 2 期作なので、両側に広がる水田には、ちょうど 10 月末から 11 月にかけて、収穫時期を迎える稲穂が重そうに首を垂れていた。黄金色に輝く風景は圧巻で美しい。

最大の難所は山越えの「寿峠」

5 日目に、高雄から屏東に向かった。そして 6 日目に、環島のハイライトである「寿峠」と呼ばれている峠越えとなる。

台湾はさつまいもによく似た縦長の形をした島だ。島の中央には南北に3000ｍ級の山々が背骨のように通っている。東西の行き来には、必ず山越えをしなければならない。海抜460メートル寿峠は南側の山越えで、環島のなかで最大の難所とされている。

本格的なヒルクライムということで、自転車に乗り慣れている人たちは嬉々としてアタックし始めた。私のようなにわかサイクリストは、どんどん距離を離されるだけでなく、お互いを励ます余裕もない。「加油、頑張れ、加油、頑張れ」をぶつぶつ唱え、自分を鼓舞しながら、頂上はまだか、まだかと、ペダルを踏み続けた。挫折して自転車から降りて推しながら坂を登る人も続出する。

峠の途中で、点在する先住民の集落をみかける。可愛らしい顔立ちの子供たちやカラフルに彩られた小学校、特徴のある壁画などにも出会える。台湾には現在、独自の文化を持つオーストロネシア系の流れをくむ16部族の先住民たちが暮らしているが、多くが南部や東部に生活しており、台北では見る機会が少ない彼らの文化を目の当たりにでき、テンションが上がっていく。

寿峠を越えられれば、環島はほぼ終えたようなものだ。長い長い坂道を一気に下り、通称「東海岸」と呼ばれている台湾の東側に到達する。西側から東側に移った途端、見えてくる景色は大きく様変わりした。無限に広がる太平洋の青さと、自然の力強さを感じさせるのが台湾の東側の魅力だ。

東海岸の景色はすばらしい

高い建造物がほとんどなく、空が高い。天気が良ければ、夜空には満天の星が光り輝き、虫の音が響き渡る。思う存分太平洋沿岸に沿って走り抜いた3日間を経て、環島の一団は再び台北に入り、いよいよゴールを迎える。

9日間も走り続ければ、いいダイエットになるだろうと思われるかもしれない。しかし、「環島は太る」が参加者の定説だ。実際のところ、私も体重が2Kg増えた。理由はいくつかある。

旅の途中で、スタッフが休憩や食事に選ぶのは、ご当地でも有名な海鮮料理やスイーツのある場所が少なくない。それは、主催者側の「おもてなし」の心からだ。美味しいものの魅力には勝てない。疲れているうえに、運動しているとの安心感も手伝って、ついつい多目に食べてしまうのである。

加えて、同行しているサポートカーに積まれたバナナやりんご、お菓子などを休憩ごとに食べてしまう。仲間から勧められれば手が出て、すっかりカロリーオーバーだ。私は、アルコールを飲まないが、飲む人にとっては1日の終わりのビールはたまらないらしく、環島一周で数万カロリーは消費しているはずだが、どうしても痩せることにはならないようだ。

環島中の食事は楽しみのひとつ

環島の楽しさは、走るなかで観光体験もできるところだ。

台湾のインフラの多くは、日本統治時代に日本人の手によって設計され、造られたものが多い。特に鉄道の敷設は、築100年以上の木造駅舎や、鉄道のトンネルなどが現在も残され、サイクリングロードや観光名所となっている。昔の製糖工場や海岸線沿いの廟など、普段の旅行では市街地から遠いのであまり立ち寄ることのできない場所に行くことができる。

今回の環島でも、温泉地で有名な台東の知本温泉や宜蘭の礁溪温泉、かつての鉄道トンネルをサイクリング専用ロードに改築した新北市の草嶺隧道、台湾一美味しいと評判の台南の伝統的な屋台料理店、日本統治時代に建設された雲林の西螺大橋、日本人建築士・伊東豊雄が設計した高雄国家体育場などに立ち寄った。

環島の際に立ち寄った屏東で

「本当の台湾」に出会う

一緒に走った仲間は、ほとんどが台湾人。20代から60代と幅広い年齢層だが、意外にも多かったのは、40から50代の会社勤務のいわゆるサラリーマンだ。社会的に責任ある立場で仕事に精を出す大人が、なぜ一週間以上もかけて、ひたすら自転車のペダルを踏み続けるのか。とても不思議である。「どうして環島に参加したのですか」と環島中、参加メンバーに尋ね続けた。

一緒に走っている仲間たち

「いつか環島するのが夢だった」「友達に誘われて」「仕事として仕方なく」「自分への挑戦」。答えは人それぞれだったが、環島を始めて日が経つにつれ、環島に対する思いは変化していき、一つに集約されたように感じた。

それは「いま私たちは本当の台湾と出会っている」という気持ちである。

台湾の各地の風景や人に出会い、美味しい地元グルメでお腹を満たし、目をみはる歴史的な建造物の存在を知る。こうした体験の一つひとつが「台湾を知る」体験であり、中国語では「認識台湾」と表現する。

自分が生まれ育った台湾という土地について、それまで曖昧であった認識が、環島を通して明確となり、「台湾人」としての意識が強まる。これこそが、台湾人が求める環島の醍醐味であることがわかった。

自転車のペダルを回しながら台湾の各地を走り、人々の息遣いや表情を手に取るようにリアルに感じた。行く先々で受けた「加油！（頑張れ！）」という声援に、台湾人の優しさが伝わった。

環島の達成感はこのうえなく気持ちがよいものだ。日本人にもその楽しさを知ってもらいたいという願いを込め、昨年11月に、環島経験を記し

た「環島　ぐるっと台湾一周の旅」(2017 年、東洋経済新報社）を出版した。

すっかり環島のとりことなった私は、2017 年 10 月に、2 回目の環島にも挑戦し、完走したばかりだ。

日本では 4、5 年くらい前から台湾ブームが始まり、ここ 3 年は、年末年始の海外渡航先人気ナンバーワンにも選ばれるくらい、台湾が日本人の間で定着した。雑誌で台湾特集が定期的に組まれ、「グルメ旅台湾」や「女子旅台湾」「癒される台湾」など、テレビ番組でも台湾を取り上げることが増え、ブームはさらに勢いを増している。

ただ、ちょっぴり残念なことは、台湾旅の定番が、2 泊 3 日の台北であり、足を運ぶのは夜市や九份、台中、高雄といったお決まりのコースからなかなか広がらないところだ。台湾にはもっと違う顔がたくさんあることを、環島というひとつの旅のスタイルで発見してもらいたい。

環島の手段は自転車だけではない。台湾には、同じように台湾を一周する形で、鉄道網が敷き詰められている。バス路線も日本以上に発達している。レンタカーを運転してもいい。時間があれば、お遍路さんのように、徒歩でも環島ができる。シェアバイクという形式も、台湾の各地方都市に整備されているので、鉄道とシェアバイクやバスの組み合わせで、自分流の環島を組み立てることも可能だ。台湾には、さまざまなスタイルで環島を楽しめるインフラとプランが整っているのだ。

今、私の生活の拠点は東京にある。東京に住んでいるからと言って、東京タワーや浅草には、数えるほどしか行ったことがない。日本の地方に出かけることも限られている。いつでも行ける、と思うことで、結局行かずじまいなことがほとんどだ。台湾に駐在している人にも、同じ状況があてはまる方が多いのではないだろうか。

自分の住んでいる場所、自分のルーツがある場所、そういうところを回ることで、自分のアイデンティティの発見につながることを、私は「環島」から学んだ。2018 年も、私は環島するつもりでいる。今度は、日本から日本人を連れて、台湾人と共に環島することで、日台の交流を実現させてみたい。台湾に興味のある方、ぜひ一緒に環島しませんか。

プロフィール

台湾人の父と日本人の母との間に生まれ、幼少期は台湾で過ごし、11 歳から日本で暮らし始める。

エッセイスト・女優・歯科医として活躍中。著作に『わたしの台南』『私の箱子(シャンズ)』『ママ、ごはんまだ？』など。